

十文字青

イラスト 白井銳利

Presented by Aqours
Illustration by Etsurō Ito



灰と幻想のグリムガル

level.2 — 大切じゃないものなんか、ない。

灰と幻想のグリムガル level.2

大切じゃないものなんか、ない。

十文字青



Characters

チーム・レンジ

- ロン class:聖騎士 —— チームのNo.2。
 サッサ class:盗賊 —— 派手女。たぶんM。
 アダチ class:魔法使い —— 眼鏡。
 チビ class:神官 —— マスコット。

暁連隊(DAY BREAKERS)

- ケムリ class:聖騎士
 ビンゴ class:死霊術師
 シマ class:剣舞師
 リーリヤ class:呪医

その他

- キッカワ class:戦士
 ハヤシ class:戦士
 ミチキ class:戦士
 ムツミ class:魔法使い
 オグ class:盗賊

その他の キャラクター

Other Characters



チーム・レンジのヘッド。
野獣系。やばい。

レンジ

class

戦士



天然癒やし系。
ちょっと微妙な関西弁?

ユメ

class

狩人



目が眠そう。
草食系暫定リーダー。

ハルヒロ

class

盗賊



引っ込み思案。
がんぱり屋の影薄さん。

シホル

class

魔法使い

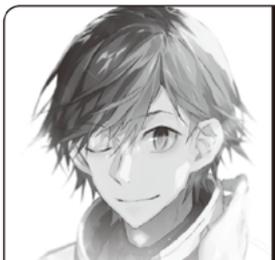


お調子者の我が儘テキーノ人間。不人気ナンバー1。

ランタ

class

暗黒騎士



マナト

class

神官

パーティのまとめ役だった。
いいやつだった。(過去形)



ソウマ

class

武士

クラン「暁連隊」を設立する。
何か目的がある模様。



メリイ

class

神官

クールな美人。義勇兵と
しては先輩で少シアダルト。



モグゾー

class

戦士

くま系。若干のろいが頼りになるくま。

【ダムロー旧市街】

オルタナの北西約4kmにあるダムローは、かつてアラバキア王国第二の都市だった。かなりの大都市だったのだが、不死の帝国に攻め落とされ、不死族の町となる。しかし、不死の王崩御後の混乱のさなか、奴隷扱いされていたゴブリンたちが反乱を起こした。ダムローをめぐる不死族とゴブリンの戦いは長くつづき、その間にアラバキア王国によるオルタナ建設が進んだ。ゴブリンたちはダムローを根拠地として王国を築きあげたが、オルタナに攻め入ってくることはない。ゴブリンは人間族の武力を警戒し、全面戦争に突入することを恐れているようだ。ダムロー南東部の旧市街は半ば廃墟と化していて、主に下層階級のゴブリンたちが住みついている。彼らは新米義勇兵たちが実戦経験を積むのにはうってつけの相手だが、中には旧市街で力をつけて新市街で一旗揚げようと狙っている野心家ゴブリンもいたりするので、油断は禁物。とくに、ホブゴブリンを連れてくるようなゴブリンは危険である。

【デッドヘッド監視塔】

オルタナの約6km北にある。オークたちが常駐している、塔を中心とした物々しい砦。オルタナの動向を監視しているらしい。過去、何度もこの砦にオークの軍勢が集結し、オルタナに侵攻してきたが、今のところはすべて撃退されている。オルタナ辺境軍による攻撃で何回か陥落したが、そのたびに奪回されている。ちょっと腕が上がってきた義勇兵が挑戦するのにならぬ。

【サイリン鉱山】

オルタナの北西8kmにある。かつてはアラバキア王国が管理している鉱山だったが、今はコボルドたちが占領しており、独自の生態系を築いている。階層ごとに分かれていて、全部で十層以上あるという。上の層ほど弱いコボルドが多く、深く潜るほど危険。一層と二層は下級のコボルドが居住しており危険度も低いが、三層からは注意が必要になる。かつてメリイは仲間のハヤシ、ミチキ、ムツミ、オグと共に第五層で凶悪なコボルドと対峙し、三人もの仲間を失っている。

【モンスター】

コボルド

大頭の人型種族。人間よりやや小柄で、身長は150cmほど。しかし、170cmに達する大きい個体もいる。人間ほど知的ではないが、見た目どおり犬に似ていて、上下関係がはっきりしており、厳格な階級社会を築いている。種族内での結びつきが強く、排他的。もともと穴居生活を好み、ドワーフやノームほどではないが、手先も器用。なかなか馬鹿にならない冶金技術を有している。コボルドは皆、呪術的な信仰に基づくお守りを所持している。身分が高いほど手のこんだ細工のタリスマンを持っていて、これが金になる。義勇兵たちは、レッサーコボルド、エルダーコボルドなどといったように、階級の違う個体呼び分けている。

【コボルドの種類について】

- **レッサーコボルド** …… 一層や鉱山付近に出没。装備や体格も貧弱。
- **コボルド**
 - ・ローワーカー …… 二層に生息。
 - ・ワーカー …… 三層より下に生息。フォロワと呼ばれることも。
- **エルダーコボルド**
 - ・フォアマン …… 三層より下に生息。コボルドの監督役。フォロワを引き連れている。

※この他にも階級ごとに役職をもったコボルドが存在している

オーク

緑色の肌をした、人間から見ると醜悪な種族。鼻が潰れていて、耳が小さく尖っていて、口が大きく、牙がある。人間よりやや大柄。身長より、横幅や厚みがある。毛髪を様々な色に染める風習を持つ。目立ちたい、強さを誇示したい者は、とにかく派手な色に染める。飾り立てるのも大好き。知能は決して低くなく、やや荒っぽい人間とたいして変わらない。ただ、戦いを好み、同族内でも揉め事が絶えない。よく血も流れる。文化レベルも人間とさして変わらず、彼らが身につける物は多岐に亘る。身体のサイズの的に、オークの所持品をそのまま人間が使うのはなかなか難しいが、まったく不可能というわけではない。そのままは無理でも、加工することで使えるようになる場合もある。人間と同じで持っている物はピンキリだが、彼らからえた戦利品はそれなりに金になることが多い。また、オーク社会では水晶製のボタンのような貨幣が流通していて、これは大きさによって銅貨の5～500倍の値段で売れる。諸王連合時代から、オークは不死族に匹敵する種族と見なされており、不死の王なき今、辺境でもっとも繁栄している種族といってもいい。人間にとっては強敵、あるいは天敵である。たまにオルタナに攻めよせてくるのは、たいいオーク。人間の言葉を操れるオークすら、中にはいる。

1. 格の違い

戦利品を買取商に売り払い、今日の儲けを山分けして、さあこれからどうしようかと話しあうでもなくだから話している最中だった。

カンカンカンカンカンカンッ。

オルタナの市場にけたたましい鐘の音が鳴り響きはじめた。

「あ、六時」ハルヒロは眉をひそめた。「……じゃないよね？ さっき、七回鳴ったし。午後六時の鐘。だいたい、こんなめちゃくちゃな鳴らし方——」

「何だ何だ何だーっ!？」ランタが天パ頭をブルンブルン振ってあたりを見まわした。

「んぬー」ユメはお下げをくいと引っぱり、目をぱちくりさせた。「何やろなあ」

「非常事態……っばい？」シホルはユメに身体をすり寄せた。

モグゾーは兜の後ろを撫でながら、不安そうにきよろきよろしている。「……もー?」

「まさか……」メリイはちよつとだけ腰を落として両目をすばめた。「敵襲?」

「え」ハルヒロは首をひねった。意味はわかるが、耳慣れない言葉だ。「敵襲って——」わああああと喚声があがった。どこだろう。けっこう遠くだ。

ランタが鼻の穴を広げて「おいおいおいおい!」とか「おーおーおー!」とか叫んでいる。なんでテンション上がってんだよ。馬鹿じゃないのか。

「メリイ、敵って」とハルヒロが訊くと、メリイは口早に「おそらく、オーク」とだけ答えた。

オーク？

「逃げろ！」と誰かがわめいた。「オーク！」「オークだぞ！」「オークだ！」「オークがきた！」「侵入された……！」

「ほ？」ユメは顎に人差し指をあてた。「オークラくんは誰の親友なん？」

「違うだろっ！」ハルヒロは反射的にツツコミを入れた。そのときだった。

市場を思い思いに行き交っていた人々が激流と化したのだ。あつという間だった。ハルヒロたちは人波にもまれた。もう押されるまま移動することしかできない。

「ちよっ——」ランタはあらがおうとしているが、無駄な抵抗だ。「何だよこれっ!？」

「うわあわああ」モグゾーは目を回している。身体がでかいぶん、かなり肘で突かれたり蹴られたりして大変そうだ。

「ぼ、帽子、が……っ」シホルの帽子が脱げた。ハルヒロはとっさに「おっ」と手をのばして、見事に帽子をキャッチした——ところまではよかったのだが、人々にぐいぐい押されまくって、仲間たちから引き離されてしまった。

「ハルくん！」ユメの声がする。「ハル……!？」あれはメリイの声だろうか。モグゾーの頭だけはかろうじて見える。でも、そっちのほうにはどうやっても行けない。

「み、みんな……！」ハルヒロは必死に手を振った。だめだ。もはやモグゾーさえどこにいるのかわからない。「みんな、気をつけて……！」

気をつけなきゃいけないのは、むしろこっちか。へたに流れに逆らったら、突き倒される。蹴っ飛ばされる。踏みじられて、死んでしまったりしかねない。それはいやだ。とりあえず、流されるまま進むしかない。

敵襲、とメリイが言っていた。敵？　オークって……？

オーク。

なんとなく聞き覚えがあるような、ないような。とにかく、何か普通じゃないことが起きているのだ。敵襲だから、ようするに敵が攻めてきた？　オークとかってやつに、オルタナが攻められてること？　それで、誰も彼も逃げている？　だけど逃げるって、どこにだよ？

ここ、街だし。みんなここに住んでるわけだし。オルタナは高くて厚い壁に囲まれている。ここより安全な場所なんてない——はずだ。と思う。たぶん。その安全なはずの場所が、敵に襲われている。それともしかして、やばいんじゃないの……？

露店がひっくり返され、品物が散乱して踏み荒らされている。もったいない。骨組みがへし折られて、ぶっ倒れている屋台もあった。店の人、シヨックだろうな。いや、それどころじゃないって。

「ぎゃあああああああああ……！」という悲鳴が進行方向から聞こえてきた。
「いる、敵が……！」「あつちはだめだ！」「逃げろ、逆方向に……！」

途端に人の波が逆流しはじめた。でも、いきなりは無理だつて。前のほうにいる人たちは方向転換しようとしているが、後ろのほうの人たちはそのまま進もうとしている。悪いことに、ハルヒロはちょうどその境目あたりにいて、身動きがとれない。「——てか、苦しいんだけど！ お、押すなって……！」

このままでは圧死する。そんな死に方、冗談じゃない。ハルヒロはなんとか人を押しのけ、かいくぐって、その先に壊れていない、暗い色の幕が下ろされた屋台があったので、中に入りこんだ。

「うっ、くっさ……」

変なおいがする。においだけじゃない。陳列台や棚に並んでいる物がそもそも変だ。生き物の死骸？ 剝製？ あとは骨とか、歯とか、羽根とか。それらを組みあわせて作つたらしい、アクセサリー？ みたいな物とか。

「こっちへおいで」

突然、声が出て、ハルヒロは「ひっ」と跳びあがった。見ると、屋台の奥で黒っぽい服を着たしわくちやの老婆が手招きしている。あからさまにあやしい。迷っていると、老婆に「早くおし！」と叱られたので、ハルヒロはおずおずと奥のほうに進んだ。

「……ええと、ここは、おばあさんの店……ですか？」

「おばあさんなんて、失礼な若造だね。レディーと呼んどくれ」

「レ、レディー」とハルヒロが言いなおしたら、老婆はニヤッと笑った。

「ゴー」

「……や、そっちのレディーじゃないよね？」

「切れないツッコミだねえ」

そもそもポケが微妙だったせいだろ何なんだよこのババアとハルヒロは思ったが、口には出さないでおいた。

老婆は、やれやれ、と肩をすくめた。「あたしは、バーバ」

「まんまかよ」

「ふん。さつきよりはマシなツッコミだね」

「そりやどうも……」

「精進しな。まあいい。あらためて——あたしはバーバ。まじない師だよ。見てのとおり、この店でまじないグッズを売ってる。おまえさんは義勇兵かい」

「そう、だけど」ハルヒロは鼻で息をしないように注意しながら、外のほうに目をやった。といっても、この屋台は幕で覆われているので、どうなっているのか見えない。でも、まだかなり騒がしいから、事件は継続中だろう。「……事件、なのかな。事件か」

「オークかい。まあ、たまあーにはあることさね。ん？ てことはあんた、新兵かい」
 「まあ、長くはないっすけど。義勇兵歴」
 「その感じだと、童貞だろ」
 「どっ……!？」

「馬鹿だね。女とやったことがあるかどうかって話をしてるんじゃないよ。義勇兵はオークを殺して一人前。その経験がないやつは童貞扱いされるものなのさ。何だ、おまえさん、ダブル童貞かい」

「……もう、シングルでもダブルでもトリプルでも、何でもいいっす」

「覇気がない！」バーバはハルヒロに人差し指を突きつけた。「おまえさん、男だろ！ 若いんだろ！ 女とやりたい、オークを殺したい！ 欲を出さないでどうするよ！」

「そういうの、なんかめんどくさいんで」

「あほうっ！」バーバは唾を飛ばしてさらに言いつのろうとしたみたいだが、パツ——と、幕がめくられた。

「あ……」ハルヒロはまばたきをした。

誰か入ってきたのだ。誰か——いや、何か？

人……じゃない。

だって、肌が緑色だ。

身体は大きい。背丈よりも、横幅が。厚みがすごい。

鼻は潰れていて、耳は小さく尖っていて、口が大きくて、猪みたいな牙がある。

髪の毛が真っ赤だ。

鎧を着ていて、重そうな片刃の剣を持っている。

何だ、あいつ。

「——オークだ」とバーバが呻くように言って、何か棒みたいな物を手にとった。「店の中に入ってくるとは！ ぎ、義勇兵、やつつけな！ 童貞卒業のチャンスだよ！」

「えっ、お、おれ!？」ハルヒロはダガーを抜こうとしたが、手につかない。「む、む、無理だって、一人じゃ！ と、盗賊だし、おれ！」

「あたしなんかババアだよ！ ほれ、気張りの、盗賊！」バーバはハルヒロの背中を、どんつ、と押した。ババアというわりには力が強い。ハルヒロは「わっ、わ、わっ」と転びそうになりながらオークに近づいてゆく羽目になった。オークはシュとかシャとかパツとかオツとかが多い謎言語で何か怒鳴って剣で突いてくる。

「いやいやいや……!？」ハルヒロはかわす。なんとかよけたら陳列台に倒れこんでしまつて、バーバに「こら、なんてことするんだい！」と叱りつけられた。

「んなこと言われたって……!」ハルヒロは陳列台の上を転がって逃げる。

オークは陳列台に上がって追いかけてきた。「オツシュバグダ……ッ！」

だめだ。死ぬ。マジで殺される。ハルヒロは「ひいひいひい！」と悲鳴をあげつつ、手当たり次第に物を投げた。ぶつけられても、オークはおかまいなしだ。やばいやばいやばい。しゃれになつてない。ハルヒロは幕に突っこんで、屋台の外に出た。

「……れ？ こない？」

と思つたら、屋台の中から「こ、こら義勇兵！」とバーバの声がした。「あんだ、この哀れなババアを見捨てる気かい！ 人でなしが……！」

「そうは言うけどさ……！」

遠くに別のオークの姿が見えた。敵襲というくらいだからあたりまえかもしれないが、オークは一人じゃない。何人もいる。まずい。

これはまずい。大いにまずい。

逃げよう。誰かがドツカーンとオークをやっつけてくれるまで、どこかに隠れていよう。バーバなんて知ったことじゃない。見知らぬ他人だし。助ける義理なんか無い。助けられそうにないし。

「しょうがない……よね？」

ハルヒロは一つ息をついた。

そして、勢いよくバーバの屋台の幕をまくりあげた。

「——くっそ……！」

なんでだよ。何をやってるんだ、自分。逃げるんじゃないやなかつたのか。いや、そりゃ逃げたいのは山々だけどさ。いくら赤の他人でも、見捨てたりしたらさすがに寝覚めが悪い。だから、しょうがなかった。本当に気が進まないのだが、人としてこうするしか。

オークが剣を振りおろし、バーバはそれを杖で受け止めて、「ふんっぬぬぬ……」と顔を真っ赤にしている。なんとか受け止めてはいるもの——ぎりぎりだよな。どう見ても。バーバはしゃがみこんでしまっている。これ以上ないくらい必死だ。というかよかつたよね、杖が頑丈で。感心している場合じゃないか。ハルヒロはダガーを抜いた。オークの背中めがけて突撃する。「背面打突……！」

ガツツと刃先が滑った。鎧だ。弾かれた。オークが振り向く。「ガシユハッ！」

「義勇兵っ！」バーバは目を輝かせた。「恋に落ちそうだよ！」

「やめてくれる!? マジで！」ハルヒロはオークに背を向けた。「こ、こっちこい！ いや、こなくてもいいけど……！」

残念ながら、オークは標的をバーバからハルヒロに変更したみたいだ。あーやめればよかった。やっぱり逃げちゃえばよかった。後悔先に立たずだ。オークが「ハツシユハツシユハツシユッ！」とか言いながら追いかけてくる。ハルヒロは屋台から出て逃げる。走っていると、すぐに息があがった。オークはけっこう重装備なのに、速い。ハルヒロは軽装で全力疾走している。でも、ぜんぜん引き離せない。「怖えーよ、もっ……！」

弱音を吐きながらも、小道に入った屋台と屋台の間を強引に通り返けたりして、ハルヒロはなんとかオークを撒こうとした。

オークは、しかし、鎧をガツシャガシャ鳴らして、どこまでもどこまでもついてくる。そろそろあきらめなくなってきた。あの、すいませーん。ゴールしちゃってもいいっすか。いいよね？

向こうの角を曲がったら、ゴールということにしよう。そこまでは粘ろう。それ以上はたぶん、無理。気力と体力の限界。引退します。ごめんなさい。

ハルヒロは半ば倒れこむようにして角を曲がった。

「しゃがめ……！」と低い、ハスキーな声が怒鳴った。

とっさにそのとおりにすると、頭上を何かが通りすぎていった。

何かというか、剣だ。

角の向こうに誰かがいて、その誰かがハスキーな声の主で、そいつが剣を横薙ぎに振るっただの。

剣はハルヒロに追いつがろうとしていたオークに命中した。

「オゴツ……！」

「……え」

ハルヒロは振り向いた。

オークは首を刎ね飛ばされていた。こっちに背を向けている銀髪の男がやったのだ。レンジ。

ハルヒロと同じ日に義勇兵になった——はずなのだが、とてもそんなふうには見えない。かっこいい鎧を身につけているうえに、ファー付きの陣羽織なんか着ちゃっているし持っている剣もごつくてすごそうだし。最初から違っやっだと思っはいたが、それにしてこの差は大きい。大きすぎる。だって、一撃だよ？

たった一撃で、オークをしとめてしまうなんて。

「大丈夫か」とレンジに訊かれて、ハルヒロはカクカクツとうなずいた。うっわ。かっこ悪っ。なっさけなっ。猛烈に恥ずかしい。慌てて立ちあがって、とりあえず礼くらいは言おうとしたら、声が飛んできた。「レンジ、まだいやがるぞ……！」

見ると、立派な鎧を着た丸刈りの男が道の向こうを指さしている。ロンだ。ロンが指し示している方向から、オークが。しかも、一人じゃない。二人。いや、三人も。

「ジール・メア・グラム・フェル・カノン」黒縁眼鏡をかけた魔法使いアダチが、杖の先でエレメンタル文字を描きながら呪文を唱えた。あれは何の魔法なのだろう。ハルヒロにはさっぱりわからない。とにかく青っぽい魔法生物が飛んでいて、一人のオークの脚に絡みついた。オークは脚をもつれさせて、転びはしなかったが、どうやら思うように歩けないみたいだ。

ただ、仲間が一人遅れても、二人のオークはかまわず駆けてくる。

——と、路地から長い脚がぬっと出てきて、一人のオークの膝を踏みつけるように蹴った。絶妙のタイミングだった。あれはかわせない。おそらく、盗賊のスキル、喧嘩殺法の膝砕だ。オークが「ギャオツ」とつんのめる。誰の仕業なのか。あの派手な装い。露出度高つ。色っぽい。サツサか。

「よくやった……！」ロンが進みでて、オークと斬り結ぶ。ロンも小柄ではないが、オークはけっこうすごい体格をしている。それでも、ロンが押しているように見える。「おらおらおらおらあ……ッ！」

でも、サツサに膝砕をお見舞いされたオークが、痛そうにしながらも体勢を立てなおして、仲間に加勢しようとしている。

そうはさせまいと、そのオークの前に立ちふさがる——と言うには、彼女はちっちゃすぎる。たぶん、百五十センチないだろう。神官の服を着て、短い杖のような物を手に持っているが、子供が頑張つてそれっぽい恰好をしているようにしか見えない。あのチビちゃん、いったい何をするつもりなのか。

「いあ……っ」チビちゃんは杖を前に出した。

オークが「フアツ！」と剣で杖を払う。

「なっ……」ハルヒロは声を失った。

杖は弾かれずに弧を描いた。杖ごとチビちゃんがくるっと回る。その勢いのまま、チビちゃんはオークの下腹部を杖で一撃した。「——やあ……っ！」

「ゴ、フツ……!」オークは崩れ落ちこそしなかったものの、足が止まった。

跳び下がったチビちゃんの頭を、レンジが大きな手で撫でた。「上出来だ、チビ」

「あう……」チビちゃんの顔が真っ赤に染まる。

次の瞬間にはもう、レンジのごつい剣がオークの肩口に食いこんでいた。オークは頑丈そうな鎧を着けているのに、レンジの手にかかれれば関係ないのか。

レンジは剣を引き抜きながら、オークの胸板を蹴っ飛ばした。

ひっくり返りかけて、あわあわしているオークなんて、レンジにとっては物の数に入らないだろう。レンジはオークの喉元に剣を突き入れ、ねじ斬った。

「おおおおおおおお……!」とロンが攻めに攻めて攻めまくり、とうとうオークに膝をつかせた。こうなったら勝ちだ。ロンは矢継ぎ早に剣を振りおろし、オークの頭をかち割った。「どっらあっ！ おらぐおらあ……っ!」

……すっげー力任せ。あと、声でかっ。

その大声に気をとられている間に、レンジが残りの一人、アダチの魔法で足止めされているオークに肉薄していた。

ハルヒロは見とれてしまった。

あの体重移動。

盗賊ギルドのバルバラ先生はまったく足音を立てないでするする歩いたり走ったりするが、あれに似ている。

あの剣捌き。

かなり重そうな剣なのに、レンジは自分の腕を振るように操る。

レンジはまるで紙でも切るみたいにオークの首を断ち斬った。

いや斬れないでしょ、骨とか硬いし、そんなふうには。

——と思うのに、実際、スパッと斬れてしまっているのだから不思議だ。

「二丁上がりか」ロンが剣の平で自分の肩をぼんぼんと叩いた。

ハルヒロはポーッとしていた。

もしかしたら、かえってそのおかげで気づいたのかもしれない。どこか一点を注視するのではなくて、全体をなんとなく、見るともなく見るような感じになっていて——何かが動いた。

建物の上だ。屋根の上。

ハルヒロはとっさに叫んだ。「レンジ、上……！」

「ッ……！」レンジは即座に跳びすさった。

一瞬でも遅れていたら、レンジはバツサリやられていただろう。

そいつは建物から飛び降りてレンジに躍りかかったのだ。オーク。もちろん、オークだ。髪は白い。光沢があるから、銀色にも見える。奇しくも、レンジも銀髪だ。銀髪はやばいの法則でもあるのか。あのオークも明らかにやばい。身体も大きい、黒っぽい鎧を身につけた上に、虎柄というかたぶん虎の毛皮のマントをつけていて、ド派手でやばい。顔にびっしりと施された入れ墨が凶暴そうでやばい。目つきがやばい。黄色い瞳が獐猛そうでやばい。それでいて表情は落ちつきはらっていて、けっこう頭がよさそうでやばい。

そして、剣。そのオークが持っている片刃の剣が、紫色っぽくて長くて分厚くて鋭そう、峰がギザギザになっていて、そうとうやばい。

ついでに、そのオークがレンジに向きなおると、周りの建物の屋根の上に十人ぐらいのオークたちがぬっと姿を現して、本当にどうしようもなくやばい。

オークたちが屋根から下りようとしたら、虎マントのボスっぽいオークが左手をあげて制した。それからやつは「オレ」と言った。——え？ オレ……？

「イシュ・ドグラン。オマエ、ナンダ」
しゃべった。

オークが、片言ではあるものの、人間の言葉を。

レンジはちよっとだけ口許をゆるめた。どうやら笑ったらしい。よく笑えるものだ。この状況で笑うとか、おかしくない？ おかしいよね？

「レンジだ。俺とやろうってのか、イシュ・ドグラン」
 「オンガシユラッドウー！」と、イシュ・ドグランとかいうらしいオークのボスが声を張りあげると、他のオークたちはそろって武器を下ろした。もしかして、一騎打ちをする宣言でもしたのか。

「おまえらも手を出すな」とレンジが仲間たちに向かって低く言った。
 やるのか。

やっちゃうんですか。本当に？

本気らしい。

というかもう、二人は打ちあっている。

いったいどっちが先手をとったのか。ハルヒロにはよくわからない。でも、二人の剣がガツツンガツツン衝突している。火花が散る。

鏑迫り合いになった。

押しあう。

だけじゃなくて、微妙に位置どりを変えながら、膝をぶつけあっている。もしハルヒロがあんなふうには膝蹴りされたら、一発で転んでしまうだろう。互いに相手の体勢を崩そうとしているのだ。だけど崩れない。

パツと離れた。

イシュ・ドグランがレンジの脚を狙う。レンジは跳んでこれをかわし、イシュ・ドグランの頭に斬りつけた。

イシュ・ドグランはこれを手甲で弾いて、すっと身を沈め——マントだ。虎皮のマントをレンジに投げつけた。ハルヒロは完全に意表を衝かれたが、レンジは違った。慌てず騒がず左手でマントを驚つかみにして、剣でイシュ・ドグランを突く。イシュ・ドグランはたぶん、いきなりのマント攻撃でレンジをびびらせて隙を作ろうとしたのだろう。その試みが失敗して、下がる。下がって、低く身構えた。

「イイゾ。ニンゲン。オマエ、イイ、センシダ」

「そうか」

レンジは短く答えながらイシュ・ドグランに迫る。また打ちあいだ。今度は、でも、レンジが攻めている。ハルヒロは知らずに拳を握りしめていた。いける。倒せる。いけ。いっっちゃえ。やれ！ 倒せ……！

いけそうだと思うたのに。

そう見えたのだ。レンジは優勢だった。そのはずなのに、突然、イシュ・ドグランの剣がレンジの左腕を深く斬り裂いた。

なんで……？

わからない。ハルヒロにはさっぱり。

レンジは距離をとって、左腕を振った。肘のあたりにそうとうな傷を負っている。ものすごい血だ。レンジの仲間たちが声をあげたり息をのんだりして、オークたちは歓声をあげた。

「レンジは左腕をだらっと下げて、右手だけで剣を扱うつもりみたいだ。というか、あの怪我だとそうするしかないか。レンジの剣はでかいし、不利だ。」

それなのに、レンジは、ふう、と息をついて、笑った。

「やるな」

さつきとは違う。

口許をゆるめただけじゃない。顔全体を、にい……と笑わせた。

ぞっとした。ハルヒロは正直、怖い、と思った。レンジが怖い。まあ、最初から怖かったけど。

レンジがまた攻めに出る。イシュ・ドグランはレンジの剣をガツとそらした。イシュ・ドグランは両手持ちで、レンジは片手持ちだ。どうしてもレンジの斬撃のほうが軽くなる。まともに打ちあつたって勝てないだろ。

実際、レンジは剣を吹っ飛ばされそうになって、なんとか持ちこたえはしたが、顔から胸までがガラ空きになった。やばいって。

「いっ……！」とチビちゃんが叫んだ。

イシュ・ドグランが、レンジの顔面に裏拳をドゴツと叩きこんだのだ。素手じゃない。イシュ・ドグランの手甲はたぶん金属製で、拳まで覆っている。レンジの鼻が切れ、潰れて、一瞬で血塗れになった。

それでもレンジは笑っている。まだ攻める。

攻めては撥ね返され、弾かれて、反撃を食らう。

みるみるうちにレンジは傷だらけになった。レンジも鎧を着ているが、全身を隈なく防護するタイプの鎧じゃない。隙間がある。イシュ・ドグランの攻撃は的確にそこを衝く。

また、イシュ・ドグランの凶暴な剣は、多少の装甲なら引き裂いてしまう。

「オツシユッ！ オツシユッ！ オツシユッ！」オークたちが足を踏み鳴らして大騒ぎしている。

レンジは攻めつづけているが、見ているのがつらい。もう意地だけだろ。それか、守りに回ったら即やられるから、攻めるしかない、みたいな。

「ロンー！」ハルヒロは我慢できなくなった。「いいのかよ、レンジのこと助けなくて！」

アダチ！ チビちゃん！ サツサ！ レンジが死んじまうぞー！」

「そんなことしたら」サツサは顔色が悪い。脂汗までかきながらも、無理やりという感じでせせら笑ってみせた。「あとであたしたちがレンジに殺される」

「うあー……っ！」チビちゃんがすごい形相で何か言った。まるで念を送るみたいに。

それが合図だったわけじゃないとは思うけど。

レンジが攻めて、イシュ・ドグランがレンジの剣をガツとそらした。少し前に似たような光景を見た。レンジは剣を吹っ飛ばされそうになって、どうにか持ちこたえる。でも、顔から胸までがガラ空きた。やばい。さっきとまったく同じだ。やられる。

イシュ・ドグランは、レンジの顔を殴ろうとしたのか。させなかった。

両手持ち。レンジはとっさに剣を両手持ちして振りあげた。イシュ・ドグランはのけぞってそれをかわした——けど、そんな馬鹿な。左手は使えなくなっていたはずじゃ。でも、げんにレンジはしっかりと剣を両手で握っている。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……ッ！」

レンジが血に餓えた野獣みたいに咆吼した。

それでイシュ・ドグランが怯んだとは思えないが、一瞬動きが止まったように見えた。レンジが斜めに振りおろした剣が、イシュ・ドグランの左肩にめりこんだ。

次の瞬間、レンジは剣を手放した。

イシュ・ドグランを押し倒して、殴る。

息もつかせず殴る。

規則的に殴る。むしろ丹念に殴る。



イシュ・ドグランはもう動かない。

あたりは静まりかえっていて、レンジがイシュ・ドグランを殴りつける鈍い音だけが続いている。

レンジの身体だけが躍動している。

最後にレンジは、両手を組みあわせて高々と振りかぶった。

それをイシュ・ドグランの顔^{たま}だつたものに叩きつけた。

そして、深いため息をつき、首を左右に曲げた。

「悪くなかった。イシュ・ドグラン。おまえの名前は覚えておいてやる」

ロンが、ふん、と鼻を鳴らした。「ポロポロじゃねえか」

アダチは眼鏡を光らせて、建物の上にいるオークたちを睨^{にら}んでいる。

サツサは今にも倒れそうだ。チビちゃんがレンジめがけて駆けてゆく。

レンジはチビちゃんを追いついてイシュ・ドグランの剣を拾いあげ、その切っ先をオークたちのほうに向けた。「おまえたちはどうする。やるなら、いっぺんにかかってこい。相手してやる」

いや——それはさすがにちよつと、ハツタリきかせすぎじゃない……？

ハルヒロとしてはそう思えてしょうがなかった。生きた心地がしなかったが、こういふときはあれくらい大きく出たほうがいいものなのか。

一人のオークが腕を振った。何人かのオークが抗議するみたいに唸^{うな}るような声を出したが、腕を振ったオークに目を向けられると黙った。

オークたちが一斉に退きはじめた。

「た……」ハルヒロはあやうくへたりこんでしまうところだった。「助かつ……た？」

ぜんぶ目の前で起こったことだ。でも、まだ信じられない。ハルヒロはレンジを見つめた。何度も見なおした。レンジってほんとにすごいんだ。強いんだ。我が身に引き比べて羨^{うらや}んだり卑屈^{ひくつ}になったりするの馬鹿馬鹿しい。……レンジ、やばい。

やばすぎる。

「あ」ハルヒロは自分の手に目を落とした。それから、あちこち見まわした。ない。

シホルの帽子。魔法使いの帽子がない。いつまで持っていたっけ。それどころじゃなかったのだ、覚えていない。とにかく、なくしてしまったようだ。

「何やってんだよ、おれ……」



最後まで立ち読みしてくれて
どうもありがとう！
続きは本で楽しんでね！